

日本のモダニズム建築を訪ねる

——知られざる名建築をもとめて—— (全 10 回)

第1回 90年前からのメッセージ：針尾送信所

渡邊研司（東海大学教授）

はじめに

今月から、日本各地に存在するモダニズム建築を紹介していく新連載をスタートさせることとなった。1890年代頃に西欧で芽生え、日本においては1920～70年代に盛況を見せたモダニズム建築は、建築から一切の装飾を排除しようとした性格から生まれるそのシンプル性と、神社仏閣などの古建築と普段我われが目にする現代建築との



針尾送信所無線塔

狭間に位置する時代性から、その歴史性や存在価値・魅力については一般になかなか伝わりにくい状況にある。しかしこのモダニズム建築こそ、空間構成や技術的側面において、現代の建築の原典ともいえる重要な存在といえ、歴史を紐解くうえで看過できない存在なのだ。

本連載中、できるだけ多くの建築を取り上げ、少しでも多くの読者の皆様にあらたな建築の魅力を感じてもらい、興味を抱いていただければと願っている。

今回はその第1回。長崎・佐世保にそびえたつ巨大建造物「はりおそうしんじょ針尾送信所」を紹介する。

近代化遺産の残る街・佐世保

近代日本において鎮守府として重要軍港の一つであった佐世保は、現在、米軍と海上保安庁のある街として、またオランダの街を再現したハウステンボスに近い街として、長崎県内では長崎市につぐ観光客数を誇りにぎわっている。しかし、長崎市内のような異国情緒を醸し出すような街並や建築は、いくつかの教会を除き、その数は少ない。むしろ入り組んだ港湾都市としての地理的、

地勢的特徴が、この街の独特の雰囲気形成している。

その中でも、佐世保の港湾施設として旧海軍によって明治末期から大正時代に建設された倉庫群は、鉄筋コンクリート技術の日本への最初期の導入事例として、そのいくつかが長崎県の近代化遺産として保存されており、これまでもいくつかの学術的研究の対象にされてきた。近代化遺産という土木的領域に多く存在する事例への関心は、一般的な建築物のようにその意匠性（デザイン性）や設計者（建築家）に向くのではなく、近代国家を建設するための技術（テクノロジー）の学習と実践にあるため、一般の人にとってみると建築以上にその価値がわかりにくいのかもかもしれない。技術的、歴史的な価値に関心がない人にとってみれば、表面上ではそれらは古びた、ただのレンガ倉庫に見えるからである。

風景化した巨大な塔

しかしながら、このようなレンガ倉庫とはあきらかに異質で、もしかするとそれら以上に人々の意識に入っていないであろう建物が、佐世保市中心街から車で40分ほど南下した西海地域、みかん畑に囲まれた針尾地区に存在している。

臨時海軍建築部によって1922年（大正11年）に建設された高さ135メートルの3本の鉄筋コンクリート造の無線塔と局舎施設からなる針尾送信所である。

高さが135メートルもあるのになぜ意識に入っていないのか。それはあまりにも高すぎるからという逆説的な答えが用意される。事実、私は20年前にすぐこの施設の近くにある西海橋を通ったにもかかわらず、風景の一部として行き過ぎてしまい、なんら注意が及ばなかった。第二次世界大戦中はこれらの塔は迷彩色に塗られていたということだが、コンクリートの灰色は、曇りの日であれば、あえて彩色しなくともその存在を消すことができるのでは思う。



下から見上げた135メートルの巨塔

卓越した技術の結晶

ただ、いったん意識に入るやいなやその存在とスケール感は、異様である。それは、戦争という非日常的事象とスケール感を逆照射している。なぜこんなものをつくらなければならなかったのか、あるいはそれほど戦争というものは技術を追い求めるのか、という感慨にも近い問いが頭をよぎる。実際、倫理的な側面を措けば、戦争は古今東西、例外なくテクノロジーを進化させるうえで、人類にとって極めて重要な事象である。1920年代から姿を現し出した国内のモダニズム建築も例外ではなく、まさにそのはじまりは社会的、経済的にも第一次大戦がきっかけとなっている。機能的都市（防空都市、駐屯基地）、最小限住宅（戦争住宅、不燃住宅）など、多くのモダニスト建築家たちがテーマとした課題である。

それゆえ、この針尾送信所は、近代国家としての日本の存在を、最新のテクノロジーを使って海外に知らしめる装置だといえよう。国際的にみても、極めて早い時期での鉄筋コンクリート技術の修得とその実践事例として捉えることができる。鉄筋コンクリート技術の建築への応用は、フランスの建築家オーギュスト・ペレ（Auguste Perret 1874-1954）が1904年にパリにフランクリン街のアパートで実践しているが、これだけの規模の建物への応用は他に類例を見ない。

なぜこのような建造物をつくることができたのか。いくつか要因があげられる。一つは臨時海軍建築部の組織的優秀さがある。東京帝国大学土木学科出身の技師真島健三郎博士を中心に、鉄筋コンクリート技術への探求と実験的取り組みがなされた。真島の部下であった技師吉田信は、針尾送信所の施工監理と指導を行った。佐世保の他に鎮守府とされる軍港、横須賀や敦賀においても海軍の施設が建設されている。針尾送信所の建設においては、建築技術部門をはじめ、職工、器材搬出入、宿舎、事務管理、食事班など、建設敷地内に一つの共同体が組織され、まさにそこでは、工事に集中できるように寝食をともにした生活が行われた。

もう一つは、日本における大工技術の卓越性がある。鉄筋コンクリートは、いうまでもなく鉄筋を組みベニヤなど木板を使った型枠をつくり、そこにコンクリートを流し込む工法である。そこには精度よく型枠を作るという技術が必要となる。在来の木造工法に慣れている大工にとって、型枠の作成はお手のも

のであった。一辺 300 メートルの正三角形の頂点に立つ無線塔は、3 本同時に工事が行われているが、それまでサイロや煙突などの建設に応用されたスライディング・フォーム工法(型枠ユニットがコンクリート打設に伴い上昇していく工法)が採られた。この型枠ユニットの高さが 1.35 メートルであり、それが 100 回繰り返されることで、高さ 135 メートルとなっている。

ほぼ同時期に台湾の鳳山^{ほうざん}に鉄筋コンクリートではなく鉄骨を使った無線塔をもつ、ほぼ同規模の送信所がつくられている(局舎部分の一部が現存)。針尾送信所には、3 塔がえがく正三角形の中央部分に電信のための動力機械室と管理室を有する局舎施設が存在する。この施設が鳳山のものと同じ形体であることが、残っていた原図から読み取れる。築山のように周囲の地形と一体となったつくりは、防空上の配慮から計画され、耐空爆仕様鉄筋コンクリートのアーチ状の屋根をもつ3つの建物が並列されており、外壁は乱石積み仕上げとなっている。



三塔の中心に建つ局舎施設

未来へ伝えるメッセージ

この針尾送信所は、2009 年度に DOCOMOMO Japan¹⁾ によって選定建築物として指定された。数年前から佐世保市教育委員会では、この建物を近代化遺産として保存しようという取り組みが開始されている。すでに施設の耐震診断などが行われ、また施工監理を担当した技師吉田信の親族によって当時の建設工事写真を中心にした資料が、教育委員会に寄贈されている。また、市役所などを使ってそれらの資料の展示会などを開き、広報誌「sasebo」に取り上げ、一般に対しても近代化遺産としての価値を紹介している。



みかん畑の中にそびえる無線塔

旧日本軍の施設の保存、活用に関し

では、施設の所有形態、管理体制などの移管など、困難な問題が存在するが、私たちは90年前に発信されたメッセージをしっかりと受取り、未来の私たちに伝えていく役目を果たしていかななくてはならない。

- 1) モダニズム建築の保存、資料整理を中心に活動する国際組織 DOCOMOMO(The Documentation and Conservation of Buildings, site and neighborhood of the Modern Movement) の日本支部。